

1 自己評価及び第三者評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2894400130		
法人名	社会福祉法人 あまのほ		
事業所名	グループホーム 楽々むら		
所在地	兵庫県豊岡市城崎町楽々浦419-6		
自己評価作成日	令和4年4月10日	評価結果市町村受理日	令和4年5月2日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	https://www.kai.gokensaku.nhl.w.go.jp/28/index.php?action=kouhyou_pref_topjigvosyo_index=true
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 福祉市民ネット・川西
所在地	兵庫県川西市小花1-12-10-201
訪問調査日	令和4年4月17日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

<ul style="list-style-type: none"> 職員は一人一人を把握し最期まで安全に安心した生活が送れるように支援している 積極的に看取りもやっている 看護師・医師との連携がとれており、また近隣にドクターヘリの離着地があり緊急時の対応も迅速にできる 理念である“にこにこいきいきゆったり”を念頭に“ここで良かった”と思える暮らしを目指している 職員への教育、研修等充実しており、各々のスキルアップが図れている 敷地内に法人の他事業者があり、大きな行事を一緒に行ったり情報交換や協力体制が万全である 自然に恵まれた環境にあり四季を感じ、心ませることが出来る 散歩にも最適である 常に家族との連携をとり“共に支え合う”ことを意識している 認知症の理解を深める事への取り組み。気づき大切に情報の共有、見直しに心掛けている コロナ禍でも、感染対策に気を配りながら、ご利用者に楽しんで頂けるよう、楽しみを模索し実施している
--

【第三者評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

<p>県内有数の温泉地として、また観光地でもある国立公園内に立地しており、建物は風光明媚な景色に溶け込んだ景観となっている。利用者は慣れ親しんだ自宅を離れ、もう一つの我が家を職員のサポートを得て築いている。コロナ禍による外出制限や家族との面会が限定されてはいるが、職員の工夫と熱意によりゆったり穏やかに、時には楽しい企画や美味しい料理に笑いが絶えない。今年は職員の強力なチームワークのもと、フェイスブックによる積極的な事業所のアピールが可能となり、新たな情報発信の機会が増えた。現在、法人が力を入れている人材育成と介護ロボット等の活用は、職員の専門性の向上と業務の負担軽減を進め、職員のやりがいと自信にもつながっていくと思われる。この先も利用者の笑顔を糧にチャレンジ精神を持ち続けていただきたい。</p>
--

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および第三者評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	者 第	項 目	外部評価		
			自己評価 実践状況	実践状況 次のステップに向けて期待したい内容	
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	各職員の名札の裏には理念を書いたカードを入れ常に共有、意識して実践に繋げている。また困った時や迷った時は必ず理念に戻るよう導いている。理念を元に、施設目標が設定され、それをもとに部門目標、ユニット目標、個人目標と設定され、振り返る機会や、評価者との面談等定期的に行っている。	利用者の心身状態の変化やそれに伴う精神面の低下があった場合などの支援内容の検討の際は、理念がベースとなっている。支援内容に迷った時も、期限を設け様子を見るなど、常に利用者の意向や想いを優先している。法人及び事業所として段階別の具体的目標を掲げ、理念実現に向け取り組んでいる。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	地域との交流には力を入れ、馴染みの関係も構築されつつあるが、この度のコロナウイルスの影響で、ほとんど交流できない現実である。認知症カフェも令和3年度は活動を中止したが、認知症カフェ推進会議には参加し、意見交換を行っている。フェイスブックを開設し、少しでも地域の方に、グループホーム楽々むらを知ってもらおうよう取り組みを行っている。令和3年度は90件の公開ができた。地域の奉仕作業には声をかけて頂くようにしており、1回のみであるが参加し、近況の報告をし合っている。	まだ地域活動は再開されていないが、近隣の神社や地蔵の清掃、草刈り、地域の奉仕作業は継続しており、必要に応じ情報交換は行っている。中止していた認知症カフェは、十分な感染対策のうえ来月から再開することを予定している。事業所を知ってもらうことを目的に行っているフェイスブックは、職員間の協力やチームワークにより、大幅に回数を増やすことができた。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	活動としては、特に行っていないが、交流の場を利用して、声のかけ方や支援の仕方等、さりげなく伝えられていると思う。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議では日々の取り組みを報告し評価、助言をして頂いている。令和3年度はコロナウイルスの影響で、数回のみ開催となったが、中止時には資料郵送にて報告を行っている。内容については、ユニットに報告をし、改善や新たな取り組みに繋げている。またご家族からの感謝の言葉は、職員にとっても活力になっていると思う。	今期の開催は、半分ほどは対面での開催で、残りは報告書のみとなった。広報誌等でイベントやお楽しみでの利用者の様子を知ってもらい、その他利用者の動向や事故報告などの活動報告を行っている。参加者からの意見等は少ないが、事業所からの情報発信を期待する声が聞かれた。	

自己	者第三	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者とは日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	運営推進会議では、地域包括支援センター職員・民生委員・区長に参加を依頼し、実情を報告、評価や助言を頂いている。特に区長に関しては、区民と施設との橋渡し役として、あらゆる場面で交流を行い、常に良い関係が築けている。また豊岡市地域密着型サービス事業者連絡協議会にも加入。相談員が協議会の役員を務めており、豊岡市の36事業所をとりまとめている。豊岡市地域密着型サービス事業者連絡協議会主催の研修会にも参加している。	運営推進会議を通じて地域包括支援センターから地域に関する情報提供がある。行政からの案内や情報は法人本部が一括し、そこから各事業所に振り分けられた情報を受け、管理者が対応している。研修はリモートが主流となっており、会議によってはリモートだけでなく対面での開催も行われており、必要に応じて参加している。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	事故防止委員会による身体拘束への意識の発信、研修を行っている。定期的に施設全体として色々な事例をもとに、身体拘束や虐待について、話し合う機会を設けている。その中で、気持ちを吐き出したり、対応策を見出したり、また考え方の統一ができるよう取り組んでいる。施設の施錠については、コロナウイルス感染対策もあり未だ施錠したままである。	3か月毎の身体拘束適正化に関する定例会議と併せ、事故防止委員会による研修で啓発に努めている。方針として身体拘束は行わないこととしており、事例や学びを通じて共有を図っている。玄関の施錠に関しては、今のところ改善にはいたっていない。	利用者の不穏や不安へのケア内容の検討、時間を区切った開錠など、何らかの工夫ができないだろうか。
7	(6)	○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見逃されることがないように注意を払い、防止に努めている	個別ケア委員会により虐待防止の発信、研修を行っている。今年度は、部長発信の研修会も行い尊厳を守る事を念頭にケアの方法を見出す努力をしている。不適切だと思われるケアについては都度声をかけあい、話し合いの場を持つようにしている。他【6】に記載している内容同様	上記同様、定例会議と併せ個別ケア委員会による研修、啓発を行っている。毎日のプチカンファレンスで、各ユニットリーダーを中心に不適切と思われる言葉づかいやケアを検討し、改善策を話し合っている。管理者は4か月毎に行われる職員面談で、メンタル面でのフォローに努めている。	
8	(7)	○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	資料をユニットに置きいつでも見れるようにしている。ご家族にお任せしている状況で支援には至っていない。	契約時に案内や説明は特に行っていないが、資料の配布や相談はいつでもできる体制でいる。現在、急遽制度の活用が発生し、関係者に対応について協議、連携を図っているところである。職員が定期的に学ぶ機会はない。	今後もこのような事例は想定されるので、積極的な情報発信、早めの対応を検討いただくとともに、職員の研修も実施していただきたい。
9	(8)	○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	面接の時点で施設の考え方や、方針等をしっかりと話している。また契約時には、しっかりと時間を取って説明を行い、また質問をしやすい雰囲気を作っている	契約に関する書類の説明だけでなく、事業所として、理念を基に、日々行っている行事や毎日の味噌汁づくりなどを通して家庭的な雰囲気重視していることを伝えている。その中で家族の協力が不可欠であることも説明している。	

自己	者 第三	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
10	(9)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	面会制限の為、家族と顔を合わせる機会が少なく以前ほどの意見交換はできていないと思う。例年通り、アンケートなどを実施し、家族・利用者の要望の把握、それに対するユニットでの話し合いの場は設けている。また、ケアプラン送付時には返信用封筒と一緒に、意見・要望用紙を添付している。体調や精神状態の変化などはその都度、電話連絡を行っている。記録も送付しているので様子は理解していただけていると思う	家族との対面での面会制限により、意見交換が十分にできていない。毎年実施している家族アンケートからも、特に意見などはあがってこないのが現状で課題として受け留めている。事業所からは、利用者の日常や体調変化など些細な内容も、都度電話で報告し、家族の思いを聞き取っている。5月にこれまで中止していた家族会の開催を考えている。	
11	(10)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	ユニット会議などを通し、現場の職員の声に耳を傾けている。その場で解決できる事は解決し、組織全体で話し合うべき内容は、必ず代表者に相談をしたり会議に持ち寄るようにしている。また個人面談も実施している。	日々起こる小さなことやすぐ実践できることは、毎日のプチカンファレンスで確認、実行している。それ以外はユニット及び全体の会議で意見を集約、実践に活かしている。職員の意向や意見等は普段の業務や個人面談などからも把握に努め、現場重視の体制となっている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	資格取得に向けてのフォローアップや研修への参加など、向上心がもてるような環境を整えている。外部研修、施設内研修の費用、超過勤務手当などもしっかりとしており、学ぶことへの意欲が高められるようフォローアップしている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	新人職員に関しては、OJTの仕組みを確立している。また日々の中での各々が成長できるようにリーダーを中心にその都度声掛けや、意見交換を行っている。内部、外部の研修も計画的に行っている。令和3年度は研修の動画サイトと契約をし、一人一人がいつでも研修が受けれるような体制を整えていた。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	地域密着型サービス事業者連絡協議会、在宅医療介護連携推進協議会に参加し意見交換を行っている。またそれぞれの協議会が開催する研修会にも参加している。		

自己	者三	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	面接時には本人が安心できるような声掛けを行い、思いを話しやすい環境作り心掛けています。本人の思いを把握し情報をフェイスシートに起こして皆で共有している。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	面接やその前の電話連絡で、十分に困りごとに耳を傾けている。話しやすい雰囲気を作り信頼できる関係づくりに努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	面接時には、しっかりと聞き取りを行い、何に困っているのかの把握を行い、そのうえで入所を決定している。面接時の聞き取りを基にケアプランを作成し必要なサービスを行っている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	基本情報や関わりの中で得意な事、苦手な事、好きな事、嫌いな事を把握している。1日を過ごす中で料理、裁縫、家事、レクリエーションを通して興味を引く事を探している。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	困りごとや、提案等はその都度、家族に相談をしている。本人にとって何が一番良い事なのかを家族と一緒に考えて答えを見出している。		
20	(11)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	特養、デイサービスがある中で馴染みの人や、昔からの知り合いに会う事が出来る。しっかりと職員が把握を行い、一緒に会いに行くようにしている。コロナウイルスの影響で直接会えない場合はリモート面会を行い、会える体制づくりをしている。	現在、同建物にあるケアハウスとのカフェでの交流は継続している。家族とはガラス越しやリモート面会での顔合わせにとどまっている。電話やはがきを通じて、近況報告などのやりとりをしている人もいる。ユニット合同でのイベントで利用者同士が交流したり、おはぎや鍋料理、切り干し大根作りなど、手作りを楽しんでいる。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	入所時は職員が中に入り紹介等を行っている。利用者同士のおしゃべりの中でコミュニケーションがとりにくい場合は間に入り、橋渡しを行っている。家事等も一緒に行い“教えて頂く”という事を大切にしている。		

自己 者 第三	項目	自己評価	外部評価	
		実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22	○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	グループホーム退所時にはも利用者の情報を移された先に提供。またその都度相談ができるように働きかけている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント				
23	(12) ○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	入所時の面談では、本人の意向、望む暮らしの聞き取りを行っている。不安や思いを受け止め傾聴している。また言葉として発せられない気持ちを表情などから汲み取る努力をしている。家族からの聞き取りも大切にしている。	生活歴や意向をベースに、職員が日々利用者から聞き取り把握した内容を加え、利用者個々の「やりたいことリスト」を作成している。内容によっては職員も一緒に行うこともある。具体的な言葉で表しにくい場合は、本人の好きなことや得意なことなどを参考にして本人本位に検討している。	
24	○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入所時には、生活歴の記載提出をお願いしている。そのシートや本人、家族の聞き取りからできるだけ早く本人の生活歴や入所への経緯を知るように努力している。入所後も聞き取りを続け、よりよいサービス提供に繋げている。		
25	○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	出来る能力に対しての見極めと、負担にならない役割りの提供を行っている。生活の質を上げていくために、思いを尊重し個別の対応を心掛けている。情報をチームで共有している。		
26	(13) ○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	現場での情報をつかみ、気づき、関わりの工夫を重ねて、本人がよりよく生きるためのケアの集積を行っている。家族のニーズや体調の変化、情報の共有と検討を重ねている。	毎月、利用者の日々の観察から得た心身状態や変化を見極め、担当職員がモニタリングを行う。入退院などの大きな変化により介護計画の変更が必要になった場合は見直す。特に大きな変化が無い場合も原則、半年毎に確認している。	
27	○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	毎日の生活を個別に本人の言葉で記録している。担当意識をしっかりと持ち、常に個人のより良い生活の為の工夫を行っている。プラン変更時のカンファレンスには『これだけは絶対にやりたい』『そのためにどうしていきたいか』を熱い思いを持って臨み介護計画に生かしている。		
28	○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	生活を豊かにし、楽しい日々を送っていたく為多様な支援の取り組みに柔軟に取り組んでいる。たったひとりのニーズであってもサービスとして組み入れる必要があれば検討を行っている。		

自己 者 第三	項目	自己評価	外部評価	
		実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29	○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	近隣の協力をえて“いきいきサロン”や“カフェ”に参加し交流し馴染みの関係が出来る。また近隣の方にボランティアとして、楽しいイベントの開催などを協力してもらっている。しかしこの度のコロナウイルスの影響で今年度は地域との取り組みが出来ていない状況。		
30	(14) ○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	嘱託医を中心とし、精神科・歯科等の専門医への往診、相談体制を整えている。その他の医療機関への受診も家族、本人の理解、協力をえながら行っている。	入居時に事業所の嘱託医が、かかりつけ医になり月に2回の訪問診療を受けている。毎月1回の精神科医や歯科医、口腔外科医の訪問診療も受けている。法人の看護師が毎日利用者の状態を把握し、かかりつけ医の診察に立ち合い、情報を伝え指示を仰いでいる。	
31	○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	日々の状態の変化はその都度看護師に報告し、記録にも残して情報を共有している。また担当看護師が普段から深く関わっているので、よく把握している。早い段階での状態変化や異常を察知し看護師を通して、かかりつけ医に相談する体制を整えている。		
32	(15) ○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時には利用者に関する情報を病院に提供している。また退院時には家族、医師等と話し合いの場を持ち本人、家族の不安や心配の軽減に努めている。	入院は、かかりつけ医の指示により、協力医療機関に入院している。入院時は、看護師から医療機関に利用者情報を伝え、早期に退院できるよう連絡を密に取っている。退院時カンファレンスに参加したり、サマリーで注意事項等を把握し支援している。事業所の隣がドクターヘリのヘリポートになっており、救急車を呼ぶとヘリが来ることが多い。	
33	(16) ○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	体調変化時には、医師より家族に対し、状態の説明や今後の意向の確認を行う。その結果を踏え施設でできる事の説明や家族の思いの聞き取りを行う。その後看護師、介護士、ケアマネ等での終末期に向けてのカンファレンスを行い臨んでいる。	「医療との連携体制と状態悪化時の対応に関する意思確認書」を契約時に取り交わし、家族の希望に沿って看取りの支援をしている。看取り時は、家族の協力が必要であり、家族への対応も支援している。看取り後早期に振り返りを行い、口腔ケアに関する反省点などを話し合い、次に繋げている。	
34	○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	年に1度、消防署に協力して頂き救命救急の講習を職員全員が受けている。施設でもマニュアルを作成し急変や事故発生時に備えている。		

自己 者 第三	項目	自己評価	外部評価	
		実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
35	(17) ○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	定期的に避難訓練を行っている。施設で作成したマニュアル等で災害時にどの様に職員が行動するかを把握している。また運営推進会議などを通して災害時の地域の方の協力の依頼を行っている。特に水害時への意識を強く持ち、訓練やマニュアルの見直しには力を入れている。避難場所として、地域の方の受け入れ態勢を整えている。	法人全体とホーム棟毎に、火災、風水害避難訓練をはじめ、非常食の検食、消火器の使用方法等々を、2か月に1回の割合で訓練をしている。水害時、事業所は上の階に垂直避難を申し合わせられている。法人施設は地域の福祉避難所に指定され、近隣住民の避難場所となっている。備蓄品は法人で準備し、事業所としては非常用持ち出し袋を整備している。	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援				
36	(18) ○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	全室個室であるため自分の時間を持ちたいときには部屋に入る事ができ、プライバシーを確保できている。しかし、共通のトイレや入浴となると職員が入り出すので守り通せていない部分もある。言葉かけにも気を付けている。	利用者は、通常名字にさんを付け呼びかけている。排泄誘導の声掛けは耳元に小声で「一緒に来てください」等と話しかけている。トイレや浴室は、ドアで仕切られ入浴中に浴室ドアの開閉を少なくしプライバシー保護に努めている。利用者は相談室で医師の診察を受けている。	
37	○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	希望に応じて、主食を変えたり、バナナなどの果物をつけて対応している。希望の飲み物、食べ物があれば自動販売機やコープの個配を利用し購入している。また、差入れなど家族の協力も得ている。		
38	○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	その日どうしたいか声に出して希望される方は少ない。日光浴や散歩の希望があり、その時は対応できている。行事がある時にはその事を先に伝え、その行事に向けて動けるように気配りをしている。		
39	○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	愛用の化粧品を使用している方もある。着替えの時には一緒に選んで好みのものを着て頂くようにしている。いつもと違うおしゃれにはいち早く気づいて声をかけ意識を高めてもらえるようにしている。月に一度の施設での散髪も自分で施行の決定を行っている。		
40	(19) ○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食事前後のテーブル拭きや食器洗いを自分の仕事として率先して下さる方もある。裏の畑で採れた野菜を調理し食べる事により、自分達で育てた野菜は美味しいと楽しく食事されている。	副菜は、法人の厨房で調理業者が作っており、ご飯とみそ汁はユニット毎に炊き利用者はみそ汁の具材の下ごしらえを手伝っている。自らテーブル拭きや食器洗いをする利用者もある。月に2回程度、ユニット毎に特別メニューとして希望の食事作りを楽しんでいる。	

自己 者 第三	項目	自己評価	外部評価	
		実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
41	○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事以外にも10時15時に水分補給をしている。水分摂取量が少ない時にはアプローチはするが結果に結びつかないこともある。食事が食べにくい方には食事形態の見直しを行ったり、PTに助言をいただき、食事の姿勢を工夫したりしている。栄養士によりカロリー計算も行いアドバイスを受けている。		
42	○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	歯科衛生士、歯科医に定期的に歯磨きのポイントを教えていただき、同時に困っていることへのアドバイスをいただいている。また研修で理解を深めている。超音波 義歯洗浄器を使い、2週に1度義歯の機械洗浄を行っている。		
43	(20) ○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	日々の様子から排泄パターンを把握し、様子を伺いながら排泄の案内を行っている。都度体調なども考慮しながら排泄用品の検討を行っている。状態変化によってはオムツ使用をする事がある。	数人の利用者は自発的にトイレに行くが、大方の利用者は支援を要し、個々の排泄パターンを把握してトイレ誘導している。骨折した利用者が退院時に、おむつを使用していたが随時のトイレ誘導でリハビリパンツに移行した事例がある。	
44	○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	排便チェックは毎日行っており、無排便3、4日になると水分を勧めている。薬に頼ることが多いが、下剤の指示が出ても看護師と相談の上見送ることもある。毎日の体操を勧めている。		
45	(21) ○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	曜日は決めているが、無理に入浴を勧めることはしていない。一人で入浴できる利用者には過度な支援を行わないよう心掛けている。施設内の行事や催しがある場合、午前中に勧める傾向がある。 □	入浴は、週に2回を予定し午前中を中心におこなっているが、個人の思いを尊重し午後にしたたり、日を変える等、状況に応じて柔軟に対応している。一人で入浴できる利用者は外から見守りし、必要時に支援している。湯は、一人ひとり入れ替えをして清潔に努めている。	
46	○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	自分のペースで部屋に帰り休めている。生活のリズムが狂ってきたら日光浴を勧めたり日中に活動するように心がけている。		
47	○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬局管理となつてからは、薬情はなく、理解できているかと言う部分では曖昧。薬の変更や追加があった時には、医師や看護師から副作用の説明などを受けるので変化の確認に努め記録に残すようにしている。また看護師への連絡も随時行なっている。		

自己	者	第三	項目	自己評価	外部評価	
				実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
48			○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	張り合いや喜びに溢れている生活ができているとは言い難いが、食後の食器洗いを自分の仕事とされている方がいる。手芸や工作、散歩などの気分転換の支援をしている。毎月やりたい事をモニタリングし、少しでも実現出来る様に支援している。		
49	(22)		○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	普段であれば、いきいきサロンやカフェに参加している。毎回こちらで人選をし地域の方と交流している。今年人気のある場所は自粛しており、希望に沿った場所へは行けていない状態。その分、行事などで外出企画を立てて人気のない所へ外出している。	コロナ下での外出は、出来るだけ人気のない場所を選び、花見などのタイミングで近い場所に出掛けている。国立公園内にある広い敷地内で畑の野菜を見に行ったり、散歩等で外気浴をしている。5月から、中断していた認知症カフェが開催予定であり、家族や地域住民との交流の機会を楽しみにしている。	
50			○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	自分でお金を持っている方は数人あるが使う事はない。預り金のある方も数人あるが、使用する機会が作れていない。		
51			○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	家族の理解が得られている場合は電話の希望があれば出来るように配慮している。手紙のやりとりも数人ある。		
52	(23)		○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	人間関係等に配慮しつつ、テーブル配置をしている。コルクボードの飾りつけをすることで季節を感じていただけるよう工夫をしている。壁面については、ご利用者と職員一緒に制作するようにしている。1日2回以上換気を行い、空気の入替えを行っている。	事業所周辺は、周りが海と山に囲まれ、窓からの景色は見るだけで落ち着ける景観である。リビングは、手作りの折り紙や貼り絵を2か月毎に作り替え、季節が感じられる雰囲気作りをしている。趣味の生け花をリビングに飾り、利用者はそれぞれくつろいで過ごしている。換気は定期的に行い、新型コロナウイルス感染や風邪予防等に努めている。	
53			○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	リビング内のソファを独りになれるスペースとして活用している。また、共有スペースが独りで過ごせる場所となり、気の合う利用者同士で過ごせる場ともなっている。		
54	(24)		○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	ベッドやテレビの位置はある程度固定されてしまいが持ち込みの家具等、家族の方が本人を交えて配置している。使い慣れたものや馴染みの品についてはなかなか持ちこめていない現状がある。	エアコン、ベッド、洗面台、大きめのクローゼットが備えられ、利用者は思い出の品を持ち込んでいます。日中利用者はほとんどリビングで過ごしており、職員が居室の掃除をしたり、整理整頓し清潔に努めている。布団はレンタルとなっている。	
55			○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	施設内には手すりが付いていて歩くときに使っている。入浴時には個々に応じ簡易手すりを付けたり外して対応している。湯船は滑りやすいので、滑り止めマットを敷いている。又、ベッドにも自立で立てる方にはL字柵を用いている。		

(様式2)

事業所名:グループホーム楽々むら

目標達成計画

作成日: 令和04年04月18日

目標達成計画は、自己評価及び外部評価結果をもとに職員一同で次のステップへ向けて取り組む目標について話し合います。
目標が一つも無かったり、逆に目標をたくさん掲げすぎて課題が焦点化できなくならないよう、事業所の現在のレベルに合わせた目標水準を考えながら、優先して取り組む具体的な計画を記入します。

【目標達成計画】					
優先順位	項目番号	現状における問題点、課題	目標	目標達成に向けた具体的な取り組み内容	目標達成に要する期間
1	25	身体の動きの維持	アセスメントにより“できる”“やりたい”を探り出来る事を楽しく続けていく 毎月チェック表による確認 年間平均70%以上	アセスメント行う “できる”“やりたい”のチェックリストを作成 日課に取り入れて実施していく 1カ月毎にモニタリングし成果を評価する	12か月
2	36	コミュニケーション能力の向上	相手や状況にあった声かけや、対応ができる チェック表による他者評価 年間各々平均80点以上	チェックをする職員を決める 評価表を用いてご利用者への対応のし方を評価する パソコン上でデータを管理、集計し誰が評価しているのか分からないようにする 自分がどのように評価されているかを知り、今後に反映させる	12か月
3	48	自ら考え動く	企画・レクリエーションを通して、自ら動く・声に出すなどリーダーシップを取る チェック表による自己評価と他者評価 年間一人5回以上、平均80点以上	きらめきを企画書におこす 事前準備、企画の説明、協力依頼を行う 当日は他職員に協力依頼の元スムーズに進める 自己評価、他者評価をする	12か月
4	52	季節を感じる	時期にあった壁面飾りで、ご利用者の生活をいきいきとしたものにする チェック表による自己評価と他者評価 年間平均80点以上	壁面飾りの構成を考える(季節感のあるもの) ご利用者と一緒にコミュニケーションを図りながら作成する(季節の話題) チェックリストにより過程と出来栄え、その後の様子を評価する	12か月
5					月

(様式3)

サービス評価の実施と活用状況(振り返り)

サービス評価の振り返りでは、今回の事業所の取り組み状況について振り返ります。「目標達成計画」を作成した時点で記入します。

【サービス評価の実施と活かし方についての振り返り】	
実施段階	取 り 組 ん だ 内 容 (↓ 該当するものすべてに○印)
1 サービス評価の事前準備	<input type="radio"/> ①運営者、管理者、職員でサービス評価の意義について話し合った
	<input type="checkbox"/> ②利用者へサービス評価について説明した
	<input type="radio"/> ③利用者家族へサービス評価や家族アンケートのねらいを説明し、協力をお願いした
	<input type="checkbox"/> ④運営推進会議でサービス評価の説明とともに、どのように評価機関を選択したか、について報告した
	<input type="checkbox"/> ⑤その他()
2 自己評価の実施	<input type="radio"/> ①自己評価を職員全員が実施した
	<input type="radio"/> ②前回のサービス評価で掲げた目標の達成状況について、職員全員で話し合った
	<input type="radio"/> ③自己評価結果をもとに職員全員で事業所の現状と次のステップに向けた具体的な目標について話し合った
	<input type="radio"/> ④評価項目を通じて自分たちのめざす良質なケアサービスについて話し合い、意識統一を図った
	<input type="checkbox"/> ⑤その他()
3 外部評価(訪問調査当日)	<input type="radio"/> ①普段の現場の具体を見てもらったり、ヒアリングで日頃の実践内容を聞いてもらった
	<input type="radio"/> ②評価項目のねらいをふまえて、評価調査員と率直に意見交換ができた
	<input type="radio"/> ③対話から、事業所の努力・工夫しているところを確認したり、次のステップに向けた努力目標等の気づきを得た
	<input type="checkbox"/> ④その他()
4 評価結果(自己評価、外部評価)の公開	<input type="radio"/> ①運営者、職員全員で外部評価の結果について話し合った
	<input type="checkbox"/> ②利用者家族に評価結果を報告し、その内容について話し合った
	<input type="checkbox"/> ③市区町村へ評価結果を提出し、現場の状況を話し合った
	<input type="checkbox"/> ④運営推進会議で評価結果を報告し、その内容について話し合った
	<input type="checkbox"/> ⑤その他()
5 サービス評価の活用	<input type="radio"/> ①職員全員で次のステップに向けた目標を話し合い、「目標達成計画」を作成した
	<input type="radio"/> ②「目標達成計画」を利用者、利用者家族や運営推進会議で説明し、協力やモニター依頼した(する)
	<input type="radio"/> ③「目標達成計画」を市町村へ説明、提出した(する)
	<input type="radio"/> ④「目標達成計画」に則り、目標をめざして取り組んだ(取り組む)
	<input type="checkbox"/> ⑤その他()